

雑詠日記

可楽余韻

卷の一

二〇二四年

谷川
修



巻頭の言葉とも言えないつぶやき

また、何ほどのものでもない雑詠を

新しい巻に書きとめることが始まる

これはもちろん歌仙を巻くことから遠い

言語ゲームほどのものでもない言葉の羅列

老いた者の文字の浪費とでも呼べばよいか

こう書きつらねても、せんないこと

いかんせん、時はとどめようもなく

遅れがちに歩むわたしを急ぎ立てる

一月五日

海蝶がたどたどしくも思索して悟りに至る夢想を紡ぐ

一月八日

松明けてバラに雀がばつと寄る

震災の能登に雪降る映像を観て園丁は果樹の剪定

一月九日

月齢は二十八日細月と明けの明星澄み渡る空

デイサービス通所老人・介護者がいっしょにお茶を楽しむモール

録画していた黒澤明監督の映画「生きる」を昨夜と今夜で観た。去年、カズオ・イシグロのイギリスを舞台にした翻案映画「LIVING」を観て書いたことがあまり適切でなかったことを知った。作家教育を受けたイシグロが筋立てのよく整った作品を書くのと異なり、黒沢は経験によって映画の作り方を学んだと言えるのだろう。黒沢の映画に粗さの残る手触りを感じるとすれば、イシグロの脚本は滑らかでそつなく進行する。黒沢作品には戦後の日本の社会が描かれていて、そこでのさまざまなタイプの普通人の生活態度もあらわである。志村喬の澄んだ大きな眼が見つめる。

一月十日

一声して大鳥冬の風雨衝く

病院に施設介護者車いす押して患者に寄り添い来る

現代日本の一風景。細君に付き添って来て何組もの人たちを目撃した。

一月十四日

かあーかあーと冬の陽だまりカラス鳴く肩にぬくもり感じつつ聞く

一月十六日

「夢二田墅ヲ訪レ後楽ヲ思ウ」

可楽余韻江辺庵

紅梅出芽招大寒

海蝶猶期終成蛹

窮道羽化越東山

一月二十日

下駄はいて会場を出る夢を見た何か覚悟を抱いていたか

一月二十三日

石臼に活けた白梅抱く氷

(九時に朗報)

一月二十四日

小庭の岩高山のごと雪冠る

耳痛いザクザク歩む凍る道

一月二十八日

この国のモールの本屋これが本？浦の老夫は呆れてすくむ

一月三十日

目くらます今の社会の正体を見抜いて暮らせ浦の老夫よ

二月一日

人の世の諸用に心乱される紅梅を見て心鎮める

コスチュームと遺影を飾る葬儀場九十二年の人生証す

(洋服)

二月二日

吾が磯で寒風耐える鴨三羽

病院から「生きているか」と調査票「はい」と答えて幸運悟る

二月五日

椿描く碗には抹茶雨は糠

二月七日

書をとれば玻璃のフクロウ凝視する

(やつと読書のゆとり)

二月九日

出来事に追いつてられて身の制御乱れてさらに老衰自覚

(寝不足)

二月十二日

仕残しの仕事「雨水」の前までに

泥の鉢浚い蓮根植え替える

二月十三日

小老夫閑居し心落ち着ける

今年二冊目の書物をやつと読み終わる。ホセ・オルテガ・イ・ガセツト著『大衆の反逆』（一九三〇年）。哲学を学んだ人の文章の中に、人間と社会の現実を大胆に掴み取る鋭い名言がちりばめられている。本日朗報。

二月十五日

白鳥と春の到来感受する

(小白鳥五羽と青鷺一羽)

二月十六日

「絶望する社会にあつて」

もしわたしに詩才があつたなら、一大叙事詩を叙すだろう
多くの人々が絶望するこの社会を一つの悲劇として
心の底に届くほど余すところなく描き尽くすだろう

二月二十五日

今の世を牛耳る者たち

御影石の議事堂で食をつなぐ無責任な者たち

自己の利益のためだけに時流に掉さす者たち

学識あるかのように権力者にすり寄る者たち

それらの行状をとがめることもなく票を入れる者たち

愚かな所業が身に帰って目も当てられない世になった

.....

老齡の者は古来言われてきたほとんどのことを経験したが

孫たちのこれからの世には祖父母たちの味合わなかった

さらに苦しい出来事が待ち受けているのではないか

大切な彼らはそれに耐えて暮らしていけるだろうか

喜ばしいことに出会えるだろうか、そう願いたいものだ

若者よ、希望をつくり出す活力を育てよ

出なくてもよい会合に仕方なく出て、空しい時間を過ごすことになった。

感冒に倒れ終日無為の行

七度五分の熱にあえいで知が萎える思念は乱れ宙に漂う

二月二十六日
コロナだと宣告される窓の外流れる川を止め潮さす

三月二日
鴨去った湾が小雪を招く朝
(高額コロナ薬五日間服用終了)

三月七日
白頭に温さが足らず春まだき
(身の卑小を痛切に感じる)

三月十一日
金華山下の川面を鴨走る
(昨日から孫と祖父母の旅)

三月十二日
大樹寺に詣で鰻を吉良で食う

羽豆崎の椿を落とす風と雨

三月十五日
木蓮を称えた教師思い出す春の陽気に身心和む
(美術の先生、男性)

三月十七日
後遺症頭は冴えず腹不調老いの旅路でまだ修行中

三月十九日

墓二つ枯れ木が倒す春彼岸

小雨散る最後の椿手折る坂

海老坂武という人の『生きるということ モンテーニュとの対話』を読んで、尊敬する加藤周一が死の間際にカトリックに入信していたことを知った。あれほど知的に考え書いた人がそうしたと知って驚いた。人間は複雑な存在であることをあらためて考えさせられる。ウィキペディアを見ると母と妹がカトリック信者だったと書いてあるから、幼少のころからの家庭環境が形成された精神に痕跡をとどめていたのだろう。ひるがえって自分のことを考えてみると、父母が熱心な浄土真宗の信者だったわたしもその影響を受けていると思う。彼岸に墓参りをするという行為もつながりがないわけではない（ただし忙しかった父母は彼岸に墓参りをしていなかったと思う。浄土真宗では信仰は自身のことというのが建前で父もそう言っていた）。不熱心なわたしは仏教に関心を寄せはしたが、結局宗教に帰依する道を選ばなかった。

最近「ゴータマ・シッダールタの覚悟」という小文蝶の雑記帳(18)に今の考えを記したが、ゴータマの教説はあくまでも人間であるゴータマの説

いた世界観と人間観であるというとらえ方である。その超越をしない姿勢は啓蒙時代のカントの認識論につながる、と思う。わたしは、ゴータマやカントといった先哲に共通する心性・考え方・生き方は貴重だ、その真髄を学びたい、と考える。そしてモンテーニュも、人間性においてゴータマやカントにつながる系譜の人だ、人間の未熟さを熟知しながら付与されているその条件を受け入れる点でわたしのような者にふさわしく、先師とすべき人だと思う。アンドレ・ジイドはモンテーニュを自分と同じ無神論者だと論じているが、キリスト教的な神はもちろん仏教が超人とするブッダを信仰することもしないわたしは、モンテーニュとカントの銅像の写真を書斎の壁に掲げて、時々二人の肖像を見て反省し、大事なことは「立派に生きることだ」と復唱している。人間ゴータマの肖像は存在しない。死後長いあいだ描かれなかったわけを考えてみなければいけない。

三月 落首

この国の年月無駄に浪費した責任者らの名を書き残せ

三月二十二日

燕祝^ほぐ内海囲む小天地

春風と陽光包む夜具に臥す

三月二十九日

風ぐ海とこの命とに春陽射す

土降つて陸と海との小天地滋養をもらい日の下に在る

ルソーの『孤独な散歩者の夢想』を読んでいる。

三月三十一日

金持ちの観光客を乗せた船黄砂に迷い吾が内海に

(吾が家の桜開花)

四月二日

台船を曳くタグボート春の声

(石灰積み出し棧橋の工事再開)

四月六日

水鳥が葉山を写す海揺らす

四月七日

袋実とカラスの豌豆退治して目をかける果樹成果を挙げよ

海風を喜ぶ浜の鯉のぼり

四月九日

重ね着の老居士の家万花散る

（小雨混じりの北東の風）

四月十二日

大根の花が書房に安らぎを

夕陽射す静まる海に大小の船がまどろみ疲れを癒す

（根をつめる日々）

四月十五日

ヤマトバラ白く咲き初め湾奥へ南風衝き白鳥渡る

四月十六日

記念日に論理の経路発見し足取り軽く中華飯屋へ

「古代倭国史の再構築」へ向けて作図や文章作りが緒に就いたばかり。

四月十七日

警世の地震に床で身を正す

四月十八日

芍薬の白い花活け冷奴

四月二十二日

霧の磯去つておとり鴻天に入る

北と東と南の山々と海岸が見えない、直近 600m しかない湾奥も。境界

を失つた霧の海が老人を招く。白いヤマトバラを襟にさして渡っていくか。

四月二十三日

イソツグミ朗々と鳴き霧が和す

(イソヒヨドリ)

五月二日

人突き上げ蝶海に遣り地が揺れる

陽だまりに花つける鉢野のぶどう

(唄が濡れ縁に)

イチジクに化粧ほどこす夏備え

五月六日

雨上がり舗道敷きつめ楠の花

志賀を見るここでも歌うイソツグミ

五月九日

春風を翼欠くボラ受けて飛ぶ

(室見川河口)

五月十一日

黒い蝶不稔の果樹を慰める

五月十二日 法話聴き鳴く雨蛙堂の外

五月十三日 甲イカが果てて波間に浮き沈み

五月十五日 果報あり海棠小さな実をつける

五月十九日 一仕事野草を活けて息一つ

五月二十日 窓打った目白埋葬すでに夏

五月二十二日 果樹に水収穫わずかグミを食む

(五月の少雨を今年も教えられる)

五月二十六日 南風生暖かく吹く浦でモンゴウイカを釣る太郎

(どこの浦の人?)

五月二十八日 この国は空襲警報発令しなくずしの戦争準備

五月二十九日 古伊万里の意匠に応じ美の意識

五月三十日

向かい風十二の漕ぎ手^ね音を上げず

(水産高校生)

六月五日

小判吊る草活けて知る閑やかさ

(野にあるが帰化植物だという)

六月十六日

小金虫葡萄之葉陰華清宮

梅雨待てず呼び水をまく老いた愚夫

六月十九日

ツツジ刈るつくばいで会う赤手蟹

六月二十一日

鳶が来る湊の寺の大葬儀読経の唱和夏空上る

六月二十六日

園丁は剪定未熟桔梗折る

(好む紫。今週は海側の手植えの木々)

掌を腫らす蜂に刺されて生を知る

六月二十七日

粗大ごみ収集する日総代が遺棄されたのを指定の場所に

六月二十九日

園丁に天からほうび玉の汗

剪定はあと小半日で終わるだろう。来年までまだⅦⅧⅨ章が残っているのに、朝の床の中で「おわりに」の締めくくりの文案を思いついた。

七月三日

梅雨晴れ間短。パンを穿く小天地

七月五日

人口が三万切った大津郡国勢変化肚で感じる

掌に一つ無花果包む道半ば

七月九日

青蓮が蛹室の居士浄化する

七月十七日

晴れた海に鷗の羽根と烏賊の甲

七月十八日

冷蔵庫故障文明と人あえぐ

七月二十日

雷神が吠えた夜が明け百合は鬼

丸い月見て音だけの遠火花

(月齡十四)

七月二十二日

熊蟬の勝鬨朝日照りに照る

七月二十四日

新聞を配るバイクの音を聞くとくに目覚めて思念が浮遊

七月二十八日

赤手蟹日陰の塀の上で避暑

隣の九十一歳の老婦人のエアコンのリモコンが見失われて、朝、本体のスイッチを入れに行った。九時半、室内温度三十二・五度。一昨日は七十五発の花火。冷蔵庫は圧縮機が不良と判っただけで、まだ待機中。

七月二十九日

地に生きる者たち鎮め夏の海

再度来たメーカーの人が冷蔵庫修理。猛暑の中四時間！頭が下がる。

七月三十一日

「猿が出た」白潟浦の回覧が地異に驚く四百年来

八月一日

蟬法師告げる、季節わずかに動いたと

八月二日　　また蜂と我が果樹園で小競り合い

八月五日　　冷厳な株価政府の無策撃つ

八月六日　　広島市ロシア招かず原爆忌　　（『第三次大戦』の中一方の側に立つこと）

八月七日　　乳飲み子に記憶のできぬ祖母の忌にふくよかに咲く青蓮の華

熊よけの鈴を鳴らして墓参り

朝と夕に墓掃除。古い方の墓地には三つの家の墓しかない。親戚は山裾のそこを嫌って墓苑に遺骨を移したが、コンクリート上の墓石は階段が運ぶのを妨げて残っている。狸だろうか、コンクリートの下を掘って巣穴をつくり、居ついたのがあるようだ。我が家の墓の側に土が掻き出されている。その土で穴の入り口を埋めたが退去してくれるだろうか。

海風に兆す秋待つ居士凡夫　　（ゴータマと同じ無神論者の居士）

八月十日

長崎市は原爆忌の招待状をロシアとイスラエルに送らなかった。すると、NATOヨーロッパ諸国の駐日大使たちが、政治的考えが入っているとして出席をとりやめ。原爆忌は政治を超えて戦争を放棄し核兵器を破棄する願いを確認するために集まるのだ。たかが政治などを超えて。

熱と下痢再びコロナ身心の老いの実相新たに学ぶ（良寛の末期は下痢）

八月十四日

人間の思考は告げるこの世には霊的なもの容れる余地なし

柄谷行人が「インタヴューを受けての回想談」で、「霊的なものの力“がある”と語っている。人間の思考を突きつめて境界を明らかにしたカントの理論を学ぶ居士は、柄谷行人の限界だと思う。語ることでできないことに答えなかったゴータマ・シッダールタは、人に可能な思考を超越しなかった、この世界に留まろうとするゴータマの態度は、カントの超越の戒めと基本的に同じだ、と凡夫にすぎない居士は思う。

八月十六日

枯れそうな果樹に渴きを癒す水

（ただ死なぬようにする効果しかない）

八月十八日

唯一つ林檎を拾い肅氣待つ

八月二十二日

胸はだけ秋風入れる炎天下

(フエーン現象。葉の萎れている桜に目白)

八月二十三日

人世未熟 此身未熟 人性之理
然尚蓮花 泥中為生 清淨昇華

而歸塵與氣

九月一日

拙夫にも不作の年に葡萄の果

九月二日

朗らかに心励ます磯^{いそづぐみ}鵜

可樂余韻 幾年有半 汝為何乎

九月三日

木々芥寄せる磯から飛び立って風ぐ秋の海千鳥が渡る

イガグリを活けてこの身の秋思^{おも}う

(『日本古代史像の転換』草案成る)

九月六日 祈願 我が天地まつとうな士を慈しめ狂乱の世を終わらせるため

九月十日 ネムの実が揺られて眠り夢を見るなかには花をまた咲かす者

狂歌 荒蕪地を見て往くバスで涙する総裁候補みな無資格者 (九人も)

九月十一日 入念にこしらえられたドームでは運動会も仮想の如く

タイトルは「神狗人」という映画世の出来事を語り尽くさず

九月十二日 ひと時も休まず動く大機構人新世の危機を深める

バスで帰る高速道路、沿線に倉庫工場などが立ち並びさらに造成中。

廃線を予期させ鉄路草茂る (人口減、大雨の傷を復旧する資力もない)

濃い緑池重く猛暑の秋の底

九月十五日

対岸の煙が燃やす秋の海

昨日の居間の室温は三三・八度。今朝は、乾燥した果菜園に水やり。コスモスの八弁の花がくずれた形で咲く。なかには枯れ始めたのも。暑さに強いほかの花まで枯れていくものがある。今、書斎の室温三一度。「天声人語」が武者小路実篤の晩年の詩を紹介、「わたしはまだ生きている。本気になって生きている」。『エミール』の次の一節も、「もっとも多く生きた人間は、∴、もっとも多く生を感じたものである」。

九月二十二日

かろうじて猛暑を止め秋分の地球が廻る動き乱さず

(乱すのは人類)

九月二十三日

秋分の次の日水が温かい

九月二十四日

毬栗いがりを開けておきな翁の採り出した実りを孫におうな嫗が送る

九月二十八日

老人の氣力衰え氣ぜわしく事運ぼうとしくじりを為す

九月二十九日

青空をかの觔斗雲馳せていく老蝶の夢運んでおくれ

十月四日

口開けて空の大鯖日を容れる

郷土史の展示に偲ぶ古代からこの地に住んだ人の暮らしを

十月五日

寺の旗緑と黄色赤白黒永代経の教は至るか

九足のヒトデ釣られて陽に渴く

吾が湾に豪華客船縁が無い

十月十三日

古市の旧家望楼秋や好し

十月十四日

人により狸が二頭道に伏す霊長の長人長たらず

十月十七日

カサゴ釣る「道草」亭主、「この湾にイルカ一頭迷いこんだ」、と

十月十八日

鴻が雲間の虹へ急きもせず

タ方の民放ニュース。大谷の属す球団が勝利を見越して次の両リーグ対戦のチケットを発売を始め、特等席の値段がなんと330万円だ、と。アメリカ合衆国の社会と経済はおかしい。数十年前に社会が中世に回帰しつつあると論じた人がいたが、世界資本主義が昇りつめて、二十一世紀の社会は経済の面で本当にかつての貴族社会のようになっていく。

十月二十一日

朝、寒露が降りた、セーターを羽織って畳の座敷に、ペルシャ風の絨毯を広げると、玄関わきのムベの実が一つ見つかる、うれしくて一枝の柘榴を書斎に飾ると、夕べ窓辺に月下美人が五人。畑では、散り際のコスモスが乱れ、四つだけの蜜柑が黄ばみ、ありふれた秋の一日が彩られる。今日の来鳥は尉鶺鴒、七五・三・一、老いた身の日々のあがきが、一冊の書物に成って、ささやかな一果明珠に。

十月二十四日

雲渡る大空仰ぎ鮪ほらとなれ

十月二十七日

青鷺とあいさつ交わす小天地今日を授かり深く息する

波紋描き天の鳥船舵手は海士

十一月三日

機に委ね城址の茶会一服す

十一月四日

雁来たか背に陽射し受け雁^{がん}ノ巢を望む渚で秋気味わう

十一月七日

自動車が智慧の日と言う立冬に万に一つの望みを託す

十一月八日

慧眼のフクロウは耳そばだてて世界を見聞き智慧深く在る

間の抜けたことをしたことに夜の床で気づいた。

十一月九日

厨房で朝日を拝み大根擦る

十一月十九日

谷染めて朝日が昇り西空はやがてしぐれて虹に入る月

十一月二十四日

我が庭のもみじ色づき冬迎え生き方学ぶ人生の冬

柁と自然に対し敬虔に

(柁といっしよに)

十一月二十五日

凧ぐ海に蒸気が昇る冬の朝

十一月二十九日

天めざす二つの虹は道半ば

(右手東側に海から立つ主虹と副虹)

海の蝶虹の断橋越えて行け

十二月二日

ミネルヴァよ、言うまでもなくわたしは、

あなたの智慧にくらべるのも愚かな者だが、

せめて為すことが、あなたのやり方に

わずかでも似ることを望みたいものだ

生きていたことを一片の痕跡にとどめたいものだ

しかし、こんなことを望む者に智慧があるとも思えない

ああ・・・

十二月六日

血糖値制御を祝い赤い薔薇

(薬を服用せず HbA1c が 5.7)

十二月七日

大雪に網戸張替え洩垂らす

十二月 狂歌

現在は狂った世界と言う者が皇帝となる陰画の世界

(誰が狂気か?)

十二月十一日

海で鵜の余念抱かぬ暮らしぶり人の生き方教えてくれる

十二月十三日

種々の海山の物大歳に、供え榊でお祓いし
往く年無事に送り遣り、迎える歳の幸願う

E・トッドが、宗教が保存してきた考え方と行動規範が薄れ(トッドはゼロ状態と言う)、自由民主主義と呼ばれる制度をとっている先進資本主義諸国で特に社会が大きく変質した、と言う。そのグローバルな社会の変質は、日本列島の辺境の小共同体にまで波及している。藩政期には浦と呼ばれていたごく小さな村の残存体の一役員である無神論者も、生活に根ざしていた古くからの慣習を一気に棄て去ることがよいのか判らない。社会の変質の中で人々が現代的な暮らし方に適合する習俗をどう見つけ出すのかを見守ることしかない。

十二月十五日

精進日マグロ到来大根抜く

(時化。父の命日とおとり越しの習俗)

十二月十九日

老果樹を伐る人もまたシルバー士

十二月二十三日

一年を心亡ぼし過ごしたが冬至も過ぎたりズムを正せ

十二月二十三日

元肥をやる園丁にお茶の花今年最後の仕事のほうび

十二月二十八日

寒風にあおられ歩む愚者怯む

軽やかに鷗は波に身をまかす

十二月三十日

ぎくしゃくし事が運ばぬ小晦日

十二月三十一日

鵯きゅう老師慧眼聰明銀河渡河

(ミミツクを鵯と書くと知った)

掌に余るほどの往く年凡夫の身

二〇二五年 正月
白江庵 謹製

『新詩集』 リルケ

ゆつくりよくかんがえるのがよいだろう

あのように失われてしまったものについて、

何かを言い表わすのには。

あの幼年時代の長かった午後について。

あれらの午後は、もう二度と戻ってはこなかった

——しかし、なぜだろう。

今でも、はっとすることがある

——雨の中で、かもしれないが

しかし我々には、それが何なのか、

もはやわからない。

もう二度と再び、人生が、出会いと

再開と、別れとに満ちていることはなかった、

あのころのように。あのころ我々に

起こっていたことは、

物や動物に起こることと何の違いもなかった。

あのころ我々は、人間の命と同じく、物や動物の

